

# 研 究 報 告

- 「Web 版 ISBN 総合目録の実現に向けた検討について」  
阿部 浩和 委員長（加須市立加須図書館）

## ○『Web 版 ISBN 総合目録の実現に向けた検討について』

阿部 浩和 委員長（加須市立加須図書館）

図書館ネットワーク専門委員会の委員長をしております、加須市立加須図書館の阿部浩和です。研修会の講演に先立ちまして、私の方から今年度の研究について、報告と説明をさせていただきます。

図書館ネットワーク専門委員会では、毎年、図書館ネットワークに関連することに関して、テーマを決め、研修会を開くとともに、年度末には報告書を作成しております。近年では、ここに書いてありますように、資料保存体制の研究として、ISBNのある資料のうち県内単館所蔵となったものを保存していく協定についてや、大学図書館・高校図書館など館種を越えた協力についてといった資料の保存と物流に関する面と、総合目録システムやそこから派生した相互貸借管理システムについての調査研究など所蔵資料情報の利用といった情報に関する面について研究を進めてきました。

昨年度は、資料保存協定等の見直しをし、今年度は「Web 版 ISBN 総合目録の実現に向けた検討」ということで、現在利用されている埼玉版 ISBN 総合目録に代わるものについて検討を重ねてきました。埼玉版 ISBN 総合目録につきましては、皆さん御存じかと思われませんが、ISBNを入力する部分に ISBN を入力し、さいたま市さんであれば、検索 2 のボタン、通常は検索ボタンをクリックすると、所蔵館が表示される他、あまり気付かれない部分としては、ISBN を 10 桁で入力すると 13 桁、13 桁表示で入力すると 10 桁のものが表示されます。

埼玉版 ISBN 総合目録のメリットとしては、ISBN のみで検索するため、処理が早く、検索ボタンを押した瞬間に結果が表示されるという点と、インターネットやネットワークに接続されていないスタンドアロン環境にあるパソコンでも、データを投入しておけば使え



る点が考えられます。この2番目のメリットは窓口にある業務端末がインターネットに接続できない場合に、大いに発揮される部分で、窓口端末からもインターネットで検索できる場合は、実感がないものと思われま

す。逆にデメリットとしては、年に4回更新されますが、その間は所蔵資料が除籍されても更新されるまでわからないという点や、ISBNのない資料はもちろん検索対象にすらなっておりません。それに加えて、図書館名の追加など必要なメンテナンスは開発者1人をお願いしているという現状があり、特に開発を継続してはいるわけではないため、万が一の時は、何も変更できないまま使えなくなってしまうことが危惧される点が挙げられます。

この埼玉版 ISBN 総合目録を利用する場面としては、主に相互貸借担当者が依頼をかけるために利用することがほとんどでしょうが、窓口カウンターで、利用者からリクエストを聞き取り、自分の館にない場合に、利用者から「近隣の図書館にないのか」と聞かれた場合なども利用することがあると思われま

す。そこで、この現在の ISBN 総合目録の課題を考えてみると、次の4点が大きなものかと思われま

す。まず、1点目は、横断検索との差別化が必要である点です。この ISBN 総合目録は何も埼玉県だけで利用していたわけではなく、近隣県でも利用されていました。しかし、Web-OPAC を公開する図書館が増えてきたのを機に、横断検索を各都道府県立図書館が主体となって公開したことにより、お役御免とされたという話を聞くと、どちらも所蔵館を探すという点では同じなため、差別化を図らないといけない課題を持っていると考えられます。

2点目3点目はデメリットに挙げましたがタイムラグとメリット部分が同等以上の代替えのシステムがないことが考えられ、最後の4点目は、相互貸借担当者がよく思っているだろうことです。つまり、ISBN 総合目録で所蔵館はわかったが、その後、各図書館の Web-OPAC を利用して資料の状況を確認し、Web 予約可能な館であれば、そのまま予約をかけ、そうでなければ自館の図書館情報システムに借受登録をして予約依頼の FAX を作成できるようにすることになります。そのため、横断検索は結果が出るまでは速くはないけれど、結果から所蔵館 Web-OPAC にリンクで飛べるため、結果的に

始めから横断検索を利用した方が速いという場合も少なくありません。

そのような課題に対して、どう考えていくかを検討したところ、課題1に関しては Web-OPAC を公開していない図書館もまだあり、その図書館でしか所蔵していない資料もあるため、そこをどうするかという考えになります。もちろん、横断検索と差別化を図る場合は、館数が多ければ多いほど横断検索は結果表示まで遅いというデメリットがありますので、その点も押さえておく必要があると思われます。

2つ目の課題に対しては、現状の3か月より短いスパンで更新できないかを考える必要があります。3つ目に関しては、パッケージ型のアプリケーションではなく、見えるプログラムを利用する方法を考える必要があります。

4つ目の課題については、相互貸借担当者が思うように、「あの結果画面をクリックしたらその館の Web-OPAC に飛べるといいな」という部分を実現させる方向性が必要と考えられます。では、どうするかということを考えますと、横断検索公開後 ISBN 総合目録を止めた考えもわからなくはないですが、逆に各館の所蔵資料の ISBN 情報を取り入れて新しいサービスを試みる図書館、例をあげると、成田市立図書館や野田市立図書館のように県立図書館所蔵資料の ISBN データをもらって、自館の OPAC に取り込むことによって、検索してヒットしないからと図書館利用をあきらめてしまっていた利用者の取り込みも出来るなど、サービスの見える化・拡大化をしている例も出てきているため、ISBN の抽出はなくす必要はありませんし、例え総合目録は副産物的扱いになったとしても、単館所蔵データを見ても、Web-OPAC が公開されていない図書館の情報を削るといった、わざわざ選択肢を狭くすることはないのではないかと思います。

また、各館におけるデータ抽出などはルーチンワークとした1か月に1度でも良いとは思いますが、それを誤りデータがないか確認し、データ加工をするなどの手間を考えると、例えば、各館のシステムで毎月末締めで ISBN を自動抽出し、それを県で用意したサイトにアップロードすれば、データベースが更新されるといった具合になると負担も少なくスパンも短くなるでしょうし、対応している

Web-OPAC がほとんどないようですが、OAI-PMH や SRU/SRW といったデータの自動収集によってメタデータを交換するためのプロトコルを利用してリアルタイムに近い方法で自動化する手法もあります。

プログラムに関しても、exe ファイル形式ではないもの、つまり、ある程度知識があれば仕組みを読み解けるような Perl や PHP を利用した形で見える化を行えると良いと思われます。そして、手間を減らすために、結果からのリンク機能や、この後に講演されますカーリルの API などを利用して便利にできるのではないかという考えが出されました。

それらをまとめていきますと、現状ではブラウザで動く ISBN 総合目録を構築すると課題は解決するのではないかと考えました。

しかしながら、私の館もそうなのですが、窓口の業務端末からインターネットに出られないため、インターネットに繋がる端末がある事務室で相互貸借業務をするならともかく、窓口にいる時間帯で、所蔵館の確認をして、借受の予定入力をすることや、利用者から「急ぎの資料確認をしたいので近隣にその資料がないか」という問い合わせに即座に答えることができないので、スタンドアロンで動くことはまだ必要だと考えられます。

その対応策として、例えば CGI でできたものを、仮想サーバを構築するソフトウェア上で動かすなどが考えられますが、それだとどうしてもファイル容量が大きくなりすぎてしまいますし、窓口業務端末に入れた場合、変な挙動をしないという保証もありませんので、その辺をより研究する必要があると考えられます。

また、新しい総合目録システムや相互貸借管理システムの研究を近年してきましたが、サンプルプログラムをゼロから作る知識や時間が足りないことに加え、それを設置して各館に挙動を確認してもらうためのサーバスペースの問題がネックとなった経験上、金銭のかかる部分はどうしても県立図書館にお願いする必要も出てくるのだろうという点が問題点としてあると思われます。

そこで、以前、館種を超えた連携の 1 つとして高校図書館との連携を研究していた時に知った、Web 版 ISBN 総合目録をベースに改良して、カーリル API と組み合わせるようにすれば、スタンドアロン環境でという問題は残りますが、リンク作成が容易で貸出状態も

わかり、NDLサーチなどとも組み合わせることによって書誌表示も可能になりますし、見えるプログラムによって、図書館の追加や表示のカスタマイズがしやすくなり、ブラウザ型であれば、検索キーを別サイトで再利用するなど可能になるのではないかと考えられました。

そこで、仕様のなものとして、ISBNのデータを検索ボックスに入れて検索し、結果を表示するまでを速さの保障としまして、スタンドアロン環境で使えるようにし、インターネットに接続可能な端末で利用すると、所蔵館をクリックすれば、リンク機能で該当館のISBN検索した資料詳細画面に飛ぶことができ、カーリルAPIの結果取得を待てば、貸出状態も表示されることによって、貸出中だったため別の館を検索するなどといった手間も減らせるようになってもらいたいと考えました。

それに加えて、各館のカスタマイズの例としまして、例えば、近隣の横断検索へのリンクを貼ったり、協力車のコース別によく利用する図書館を優先的に表示したり、逆に結果を絞り込んだりすることができるようになると良いと思います。また、ページの遷移やセッションの問題も含むので、欄外記述の仕様ですが、一々入力するのが面倒なWEB予約用のIDやパスワードがリンク後ログインして利用できるると非常に便利になるのではないかと考えました。

机上の空論的な話かもしれませんが、実際のサンプルプログラムや画面イメージがつかめなかったかもしれませんが、近年、各館の資料費が削減され、全国的にも相互貸借が盛んな埼玉県だからこそ、相互貸借業務の軽減を図るためのツールとして、新しいISBN総合目録システムを作っていくことを考えていく必要があります、その第一歩になると良いなと感じています。

つたない説明ではございますが、今回の研修会開催にあたり、この後の講演に繋がる今年度の研究報告とさせていただきます。

この研修会を含めた報告書につきましては、埼玉県図書館協会のページにアップする予定ですので、興味のある方はご覧ください。

以上、今年度の研究報告を終わります。ありがとうございました。